

自然観察 Now

野幌森林公園自然情報

平成24年度 No.5

平成24年9月9日発行

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ダンゴムシの生態

森の中の園路や落ち葉の下でダンゴムシを見つけることがあります。つかまるとまるくなり、手のひらで転がして遊んだ人もいると思います。

私たちが普段ダンゴムシと呼んでいるのは、オカダンゴムシの通称です。節足動物の甲殻綱ワラジムシ目オカダンゴムシ科に属します。昆虫ではなくカニやエビなどと同じ仲間で、体はキチン質という硬い物質でできた甲羅をもち、14の節と7対（14本）の脚があります。暗く湿った場所を好んで、落ち葉の下や土中にすみ、落ち葉、動物の死骸、菌などを食べて生活しています。

（まるくなる理由）

まるくなる理由の1つは、外敵から身を守るためです。危険を感じると脚も触覚もしまいこみ、硬い甲羅を外側にして球状になり身を固めます。元に戻る時は、まず触覚だけを出して周囲の安全を確認し、その後ゆっくりと元の姿に戻ります。

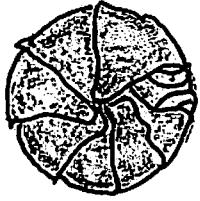
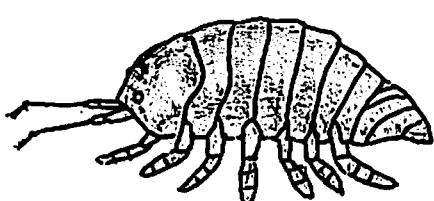
理由の2つは、体内の水分が蒸発するのを防ぐためです。大昔、オカダンゴムシの祖先は水中で暮らしていたとされ、時が経つにつれて水中から水辺、さらには湿地や森林など陸上へと生活の場を変えてきたと考えられています。

このことから本質的には乾燥に弱い体质で、暑い夏や空気が乾燥する冬は、落ち葉の下で動かずにまるくなっています。

（子育て）

母親は腹に袋状の保育嚢とも呼ばれる育房を持っており、この中に卵を産みます。一度に産む卵の数は30個から250個で、2週間ほどで孵化し育房の中で1週間育てられます。その後、育房の薄い膜を破り成体と同じ姿になった子供達が出てきます。子供は当初、白い色をしていますが脱皮をくり返すうちに色も濃くなり、約1年で成熟し色も暗灰褐色になります。

オカダンゴムシの脱皮は、全体を一気に脱皮するのではなく、まず後ろ半分を脱皮し、その約1週間後に前半分を脱皮します。これは脱皮直後の甲羅は柔らかいので安全のために分けているという説や、一度にカルシウムを大量に失うのを防ぐためという説もあります。



体長は1cm程度、体は長楕円形、色は暗灰褐色